

合評会

馬場智一著『倫理の他者—レヴィナスにおける異教概念』をめぐって

馬場智一（日本学術振興会特別研究員 PD、学術博士）

杉本隆司（一橋大学社会学研究科特別研究員、社会学博士）

小野文生（京都大学教育学研究科非常勤講師、人間・環境学修士）

<自著紹介>

『倫理の他者——レヴィナスにおける異教概念』（勁草書房、2012年3月、494頁。）

馬場 智一

レヴィナスにおけるハイデガー批判の鍵概念である異教概念を、語源、概念史、そして初期レヴィナスにおけるハイデガー解釈という観点から複合的に論じた。レヴィナスのハイデガー批判に対し、デリダにより厳しい疑義が提示されて以来、レヴィナスの異教批判が内包する哲学的、情況論的射程は見逃されたままであった。本論はこの点を再照射しその意義を明らかにすることを目的としている。しかし異教概念自体がこれまで哲学史あるいは思想史的観点から検討されたことはなかったゆえに、3部構成のうち、第1、2部を語と概念の歴史に当てた。これを踏まえた上で、第3部ではレヴィナスにおける異教概念の歴史的規定性と特殊性を浮かび上がらせた。

レヴィナスが使用するフランス語の *paganisme* という語は直接にはラテン語の *paganus* に由来する。元来は州、地方、村などを意味していた *pagus* の派生形でありその住民を意味していたにすぎない *paganus* が、「異教徒」を意味する語として使用されるようになったのは5世紀初頭に起きた蛮族によるローマ侵攻以降であり、とりわけアウグスティヌス『神の国』やオロシウス以降である。この語はそれまで聖書翻訳語として使用されてきた *gentes* や *gentiles* に取って代わったもので、聖書の宗教の信徒とそれ以外を分ける神学的世界観を表明するものであり、また歴史的には、キリスト教化したヨーロッパの自己規定に必要な概念でもあった。

異教徒を批判する論理自体は、聖書の偶像崇拜の禁止に遡ることができるが、古代の護教論的言説におけるその基本形態は世界崇拜への批判であった。これがアウグスティヌスにおいて歴史哲学的観点を獲得し、語彙とともに完成をみる。当初護教論的必要性から生じた異教概念は、その歴史的必要性から解放されるにつれ形式化し、教会内部の批判（ルター）、啓蒙思想（特にヴォルテール）、新大陸発見ともなう人類学的関心（ヒュームやドゥ・ブロス）のなかにその新たな形態を見いだす。神学的歴史哲学においては単なる否定的価値しか与えられない異教は、啓蒙への反動から生まれたヘルダーやシェリングにおいては積極的な役割を獲得している。シェリングによる異教の積極的な位置づけはローゼンツヴァイクを経由してレヴィナスにもその残響を認めることができる。

ハイデガーの現存在分析を批判的に摂取しつつ、新トマス主義者ジャック・マリタンとも共鳴するナチズムの哲学的批判に取り組むなかで異教的存在様態の分析に至ったレヴィナスは、『全体性と無限』において異教概念に倫理の必然的他者としての意義を認めている。しかしその後この意義は消失し、土地への根付きという否定的性質のみが強調されるようになる。これが『存在の彼方』以降の思想的変遷とも不可分である。

<著者紹介>

馬場 智一（日本学術振興会 特別研究員 PD・一橋大学）・博士（学術）

専攻：哲学/倫理学/思想史 一橋大学大学院言語社会研究科単位取得退学

2008年「倫理の他者、レヴィナスにおける異教概念—語源、概念史、ハイデガー受容の観点から」にて学位取得

2011年度日本哲学会若手研究者奨励賞受賞（論文「ユダヤ哲学～西欧哲学批判へ—ジャコブ・ゴルダンと初期レヴィナス」にたいして）

著作・論文：『倫理の他者』の他、Figures du dehors -- autours de Jean-Luc Nancy, Nouvelle Édition Cécile Defaut, 2012（共著）、「ユダヤ哲学から西洋哲学批判へ—ジャコブ・ゴルダンと初期レヴィナス」日本哲学会編『哲学』第63号など

<評者紹介>

杉本 隆司（一橋大学大学院社会学研究科・特別研究員）・博士（社会学）

専攻：フランス社会思想史・宗教思想 一橋大学大学院社会学研究科修了

2008年「フェティシズムと近代フランス宗教思想に関する歴史的考察 —ド・ブロス、コンスタン、コントー—」にて学位取得

2009年10月日仏社会学会奨励賞 「著作・翻訳の部」（シャルル・ド・ブロス『フェティシユ諸神の崇拜』法政大学出版局、に対して）

著書：『社会統合と宗教的なもの—19世紀フランスの経験』（共著、白水社、2011）

訳書：マチエ『革命宗教の起源』（白水社、2012）

小野 文生（京都大学大学院教育学研究科・非常勤講師）・修士（人間・環境学）

専門：哲学、ドイツ思想史、ユダヤ思想、教育学

京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程学修認定退学

2009年9月 第6回教育思想史学会奨励賞受賞（論文「分有の思考へ——ブーバーの神秘主義的言語を対話哲学へ折り返す試み」[『教育哲学研究』第96号、2007年11月]に対して）

主要著論文：『言語と教育をめぐる思想史』（共著、勁草書房、近刊）、「〈境界〉のラディカリズム—西田幾多郎とマルティン・ブーバーにおける媒介の論理について」（『西田哲学会年報』第9号、2012年）